集団宿泊的行事の教育効果に関する研究（Ⅰ）

佐伯英人・石原貴志*・二橋正宏*・髙柳周三*・宮本真由美*・齋藤央美*

Study on the Educational Effects through the Group Stay Event（Ⅰ）

Hideto SAIKI, Takashi ISHIHARA, Masahiro NIHASHI,
Syuzou TAKAYANAGI, Mayumi MIYAMOTO, Ohmi SAITOU

(Received September 28, 2007)

要旨

学校では特別活動の学校行事の一つとして集団宿泊的行事を行っている。本論文ではその集団宿泊的行事の教育効果を性別に着目して研究した。調査の対象は浜松市立庄内中学校の第1学年105名とした。調査の方法には質問紙法を用い、調査は2時点（集団宿泊的行事開始前時，集団宿泊的行事終了時）で実施した。第1学年105名中、102名（男子52名，女子50名）から回答を得て、因子分析、分散分析を行った。因子分析を行った結果、「学級内信頼感」、「自己信頼感」、「他者理解」の3因子が抽出された。抽出された因子を尺度として用い、分散分析を行った結果、集団宿泊的行事の教育効果は次の①～③のように尺度ごとに異なって表出した。

① 「学級内信頼感」は男子と女子で集団宿泊的行事の教育効果に違いがみられた。

② 「自己信頼感」は男子と女子で集団宿泊的行事の教育効果に違いがみられなかった。しかし、性別による得点差がみられ、また、学年全体としての教育効果もみられた。

③ 「他者理解」は男子と女子で集団宿泊的行事の教育効果に違いがみられなかった。また、性別による得点差がみられず、学年全体としての教育効果もみられなかった。

キーワード
集団宿泊的行事、教育効果、性別

Ⅰ　問題の所在と研究の目的

中村ほか（2006）が「『生きる力』や『社会的スキル』の変容、『前頭連合野の望ましい変化』、『有能感、他者受容感、自己決定感の向上』等、キャンプが参加者にもたらす効果についての研究報告は多数されており、それらはキャンプの効果を一般化するためにも、有効なデータである。」と述べているように、近年、集団宿泊活動の教育効果については数多くの研究がなされ、教育効果がみられたと報告されている。ただし、研究の対象となっているのは主として国立少年自然の家といった独立行政法人、財団法人、ＮＰＯ法人、国立大学法人などの機関（以下、法人等と称する）が主催し、実施している集団宿泊活動である。なお、本論文においては、この法人等が実施している集団宿泊活動を「長期キャンプ」と称する。

＊浜松市立庄内中学校

一方、小・中・高等学校など（以下、学校と称する）においても集団宿泊活動が実施されている。これら学校が主体となって実施している集団宿泊活動は、教育課程の中に位置付けられているものであり、「長期キャンプ」とは異なる点が多い。ちなみに、小学校では特別活動の学校行事の中の遠足・集団宿泊的行事に該当し（小学校学習指導要領［平成10年12月］）、中学校及び高等学校では特別活動の学校行事の中の旅行・集団宿泊的行事に該当している（中学校学習指導要領［平成10年12月］・高等学校学習指導要領［平成11年３月］）。本論文においては、この学校が主体となって実施している集団宿泊活動を「集団宿泊的行事」と称する。

この集団宿泊的行事については首藤（1992）、中島（1994）、片山・駒田（2004）といった先行研究があるが、研究自体が少なく、教育効果が十分に明らかにされているとはいえない。

なお、長期キャンプを対象とした研究において、男子と女子で教育効果に違いがみられたという報告がある（瀧ほか，2005　国立室戸少年自然の家，2004）。また、集団宿泊的行事を対象とした研究においても、首藤（1992）と中島（1994）では、男子と女子で教育効果に違いがみられたという報告がなされている。

そこで、本論文では集団宿泊的行事の教育効果について性別に着目し、研究することとした。

Ⅱ　集団宿泊的行事の目的と実践のようす

1　集団宿泊的行事の目的

浜松市立庄内中学校（以下，庄内中学校と称する）の2007年度の第１学年の生徒数は105名（男子53名，女子52名）であり、３つの学級から成っている。各学級の人数は35名である。

さて、この庄内中学校には、地域にある３校の公立小学校から、それぞれほぼ同数の児童が入学してきている。つまり、入学して初めて知り合ったという友達が学級内に多数いるという状態である。そこで、庄内中学校では「学級内のかかわり合いを広げ、深めさせることで、友達（他者）を理解する支持的風土をつくり、学級内の信頼関係を築く。」という目的をもって集団宿泊的行事を実施している。

また、生徒は入学してきたばかりであり、中学校生活３年間がこれから始まる。この中学校生活３年間を考えるだけでも、さまざまな困難に出会うことが予想される。これから出会う困難な場面をのり切るためには、生徒自身が自分を信じ、努力することが大切になってくる。そこで、庄内中学校では困難な状況を努力することで克服させる体験を積み重ねるように支援している。この集団宿泊的行事も「生徒に充実感や達成感を味わわせることで、自分自身を信じられるようにする。」という目的をもって実施している。

つまり、庄内中学校は、これら二つの目的をもって2007年度の集団宿泊的行事を実施したということである。

2　集団宿泊的行事の実践のようす

庄内中学校では2007年５月30日～６月１日に２泊３日の集団宿泊的行事を行った。利用した施設は浜松市かわな野外活動センターである。集団宿泊的行事の概要を表１に示す。主な活動については、事前の活動、１日目の活動、２日目の活動、３日目の活動の順に示した。

表１　集団宿泊的行事の概要

１日目		２日目		３日目	
時間	内容	時間	内容	時間	内容
8:00	出発式	6:00	起床	6:00	起床
8:30	バス乗車	6:30	清掃	6:30	清掃
9:30	駐車場到着	7:00	朝の集い	7:00	朝の集い
9:45	徒歩で移動	7:30	朝食	7:30	朝食
10:15	センター到着	8:30	炊飯食器返納点検	9:00	沢登り
10:30	入所式	9:30	ウォークラリー	12:30	昼食
11:00	入室オリエンテーション	12:00	昼食（弁当）	13:30	退所式・解散式
11:30	昼食	15:00	キャンドルセレモニーの	13:50	徒歩で移動
13:30	場内自然散策		出し物の練習	14:20	バス乗車
14:30	炊飯活動・夕食	17:30	夕食	15:40	学校到着
18:30	ナイトウォークラリー	18:30	キャンドルセレモニー	15:50	最終確認
20:30	入浴	20:30	入浴		
20:50	夜食	20:50	夜食		
21:30	代表者会議	21:30	代表者会議		
21:50	連絡・就寝準備	21:50	連絡・就寝準備		
22:00	消灯	22:00	消灯		

（１）事前の活動

集団宿泊的行事の班の編成は、それぞれ異なる小学校出身の生徒が入るように教師が指導意図をもって行った。男女混合の６人の班を基本として編成した。各学級35人であるため、学級内に６つの班（第１班～第６班）ができた。ただし、３学級とも第６班は５人の班となっている。

班の中での仕事の分担は生徒の話し合いによって決めさせ、一人に一役（班長１名、野外活動係２名、生活係１名、保健係１名、食事・衛生係１名）があるようにした。ただし、各学級、第６班は５人の班であるため、野外活動係を１名とした。そして、事前に係ごとの会を数回開き、活動にそなえさせた。

キャンプファイヤー（雨天の場合：キャンドルセレモニー）の出し物は学級単位で行うように設定し、学級ごとに準備した。

（２）１日目の活動

場内自然散策は活動範囲を決め、班活動としてではなく、自由にかかわり合う中で行わせた。炊飯活動は班活動とし、カレーをつくった。ナイトウォークラリーも班活動とし、各班に懐中電灯１個と地図を持たせ、明かりのない夜道を歩く活動を行った。

（３）２日目の活動

ウォークラリーは班活動とし、各班にコマ地図（ピースマップ：部分的に切り取った地図）と昼食用の弁当を持たせて行った。このウォークラリー中に天候がかわり、途中からは小雨の中での実施となった。当初、キャンプファイヤーを予定し、準備していたが、雨天のため、キャンドルセレモニーになった。キャンドルセレモニーの出し物などは予定どおり、学級単位で行った。

（4） 3日目の活動

沢登りは班活動とし、川の上流に向かって登って行く活動を行った。前日、雨天であったため、地面にぬかるみが残り、河川の水量も少し増加していた。そのため、運動靴のまま水の中を歩いたり、湿った岩場を登ったりすることもあった。

Ⅲ　質問紙の作成と調査の方法

庄内中学校が集団宿泊的行事を実施する目的に対し、その教育効果を測定するために天貝(1995)、井上（2003)、CONE・日能研・日本文理大学共同研究事業（2004）を参考に質問項目を作成した。

質問紙では「次の項目（こうもく）について、あなたの思いを教えてください。」という教示を行い、5件法で回答を求めた。なお、5件法は「まったくあてはまらない（1点)、あまりあてはまらない（2点)、どちらともいえない（3点)、だいたいあてはまる（4点)、とてもあてはまる（5点)」とした。

調査は質問紙による学級単位の一斉調査を学級担任に依頼し、集団宿泊的行事前後の2時点（集団宿泊的行事開始前時，集団宿泊的行事終了時）で実施した。調査の対象は先に述べたように庄内中学校の第1学年の生徒105名（男子53名，女子52名）とした。なお、欠席等があり、回答者数は105名から102名（男子52名，女子50名）になった。この第1学年の生徒102名には、反復測定を実施するため、質問紙に出席番号を回答してもらった。また、性別についても回答してもらった。

Ⅳ　因子分析の方法と結果

因子分析には集団宿泊的行事の影響を受けていない開始前時の得点を用いた。因子抽出法には主因子法を用い、固有値が1以上であり、固有値の落ち込みがみられるところまでを抽出の基準とした。その結果、基準を満たす因子が3つ得られたので、3因子構造と判断した。そこで、因子の回転（Promax 回転）を行い、因子負荷量の低い項目（絶対値0.40未満）を削除し、再度、因子分析を行った。この手順を因子負荷量の低い項目がなくなるまで繰り返した。そして、得られた3因子を「学級内信頼感」、「自己信頼感」、「他者理解」と命名した（表2・3)。

さらに各尺度の内的整合性を検討するために Cronbach の α 係数を算出した。その結果、「学級内信頼感」は $\alpha=0.96$、「自己信頼感」は $\alpha=0.84$、「他者理解」は $\alpha=0.78$であった。

なお、因子分析には統計解析プログラム SPSS for Windows 10.0を使用した。

表２　因子分析の結果

	因子負荷量		
	第１因子	第２因子	第３因子
この学級の中で私は安心してすごすことができると思う。	0.96	0.10	−0.27
この学級の人は話しやすい。	0.96	−0.11	−0.10
この学級の人は仲が良いと思う。	0.88	0.16	−0.23
今後、私はこの学級の人と楽しく活動できると思う。	0.86	0.07	−0.08
この学級の人と気軽（きがる）に話をすることができる。	0.82	0.09	−0.08
この学級の人と活動するのは楽しいと感じる。	0.78	−0.03	0.18
この学級の人は人を大切にしていると思う。	0.76	−0.11	0.14
この学級の人は困っている人がいたら助けようとすると思う。	0.72	0.00	0.08
この学級の人は私に親切（しんせつ）にしてくれている。	0.71	0.02	0.12
私は、この学級の人を信じている。	0.70	−0.09	0.33
この学級の人は正直（しょうじき）にかかわり合っていると思う。	0.67	0.00	0.27
この学級の中に仲の良い友達がいる。	0.61	−0.16	0.17
私は、この学級の人と正直にかかわり合っていると思う。	0.60	0.12	0.10
私は、この学級内に信じることのできる人がいる。	0.48	0.05	0.30
私は自分自身が信頼（しんらい）できる人間だと思う。	−0.05	0.78	0.07
私は自分自身を信じることができる。	0.01	0.78	−0.02
今はできなくとも、たいていのことはうまくできるようになると思う。	0.03	0.68	0.03
私は自分自身の行動をコントロールすることができる。	−0.03	0.60	0.07
私は自分に自信がある。	0.11	0.58	0.09
私は私で、決して他の人にはとってかわることのできない存在（そんざい）であると思う。	−0.02	0.50	0.07
私は他の人の気持ちがわかると思う。	−0.09	0.26	0.70
私は、この学級の人の良い部分が見える。	0.23	−0.08	0.66
私は、この学級の人の考えていることが分かる。	−0.02	0.16	0.60

（主因子法・Promax 回転）

表３　因子相関行列

因子	第１因子	第２因子	第３因子
第１因子	1.00	0.51	0.65
第２因子	0.51	1.00	0.50
第３因子	0.65	0.50	1.00

（主因子法・Promax 回転）

Ⅴ　分散分析の方法と結果

１　分散分析の方法

教育効果を測定する目的で作成した尺度の得点は、最低得点を０とするために、各項目の合計得点から項目数を引いて算出した。つまり、「学級内信頼感」の場合は14項目、回答は５件法（１点～５点）であるため、最低得点が０点（得点の和の最低値14－項目数14）、最高得点が56点（得点の和の最高値70－項目数14）となる。「自己信頼感」の場合は６項目、回答は５

件法（1点～5点）であるため、最低得点が0点（得点の和の最低値6－項目数6）、最高得点が24点（得点の和の最高値30－項目数6）となる。「他者理解」の場合は3項目、回答は5件法（1点～5点）であるため、最低得点が0点（得点の和の最低値3－項目数3）、最高得点が12点（得点の和の最高値15－項目数3）となる。

そして、性と調査時を要因とする2（男，女）×2（集団宿泊的行事開始前時，集団宿泊的行事終了時）の2要因分散分析を行った。分散分析には統計解析プログラムSPSS for Windows 10.0を使用した。

2　分散分析の結果

（1）「学級内信頼感」の分散分析の結果

「学級内信頼感」の平均値と標準偏差を表4に示した。先に述べた2要因分散分析を行った結果、性と調査時による交互作用効果がみられた（$F(1,97)=6.77$，$p<0.05$）。

表4　「学級内信頼感」の平均値と標準偏差

性	人数	集団宿泊的行事開始前時	集団宿泊的行事終了時
男子	51	44.53（12.56）	43.35（12.14）
女子	48	43.65（10.17）	45.29（10.25）

（　　）内は標準偏差　　min=0，max=56

（2）「自己信頼感」の分散分析の結果

「自己信頼感」の平均値と標準偏差を表5に示した。先に述べた2要因分散分析を行った結果、性と調査時による交互作用効果はみられなかった（$F(1,95)=0.44$，n.s.）。

そこで、性による主効果と調査時による主効果についてそれぞれ検討した。その結果、性による主効果がみられた（$F(1,95)=5.62$，$p<0.05$）。また、調査時による主効果もみられた（$F(1,95)=5.58$，$p<0.05$）。

表5　「自己信頼感」の平均値と標準偏差

性	人数	集団宿泊的行事開始前時	集団宿泊的行事終了時
男子	49	15.71（3.76）	16.20（4.18）
女子	48	13.69（4.26）	14.56（4.06）

（　　）内は標準偏差　　min=0，max=24

（3）「他者理解」の分散分析の結果

「他者理解」の平均値と標準偏差を表6に示した。先に述べた2要因分散分析を行った結果、性と調査時による交互作用効果はみられなかった（$F(1,98)=0.75$，n.s.）。

そこで、性による主効果と調査時による主効果についてそれぞれ検討した。その結果、性による主効果はみられなかった（$F(1,98)=2.14$，n.s.）。また、調査時による主効果もみられなかった（$F(1,98)=0.56$，n.s.）。

表6 「他者理解」の平均値と標準偏差

性	人数	集団宿泊的行事開始前時	集団宿泊的行事終了時
男子	52	7.27 (2.60)	7.56 (2.80)
女子	48	8.10 (2.08)	8.08 (2.40)

(　　)内は標準偏差　　min=0, max=12

Ⅵ 研究の考察

1 「学級内信頼感」についての考察

「学級内信頼感」について2要因分散分析を行った結果、性と調査時による交互作用効果がみられた。このことは、男子と女子で集団宿泊的行事の教育効果に違いがみられたことを意味している。男子は集団宿泊的行事開始前時より集団宿泊的行事終了時の得点が低くなっていた。しかし、女子は集団宿泊的行事開始前時より集団宿泊的行事終了時の得点が高くなっていた。

この原因について、集団宿泊的行事を指導した教師の見取り（生徒の行動観察）を基に考察する。

集団宿泊的行事中、生徒は、炊飯活動、ナイトウォークラリー、ウォークラリー、沢登りなど多くの場合、班で活動した。それらの班活動では事実上、女子が主導権をにぎって活動している場面が多く見られた。つまり、女子がリーダー的な役回りをし、男子は女子の指示を受けて活動することが多かったということである。男子は協力するという立場で活動することが多かったため、班内で自分の意見が通らず、ストレスをためていたものと考えられる。このような男女の活動の様態の違いが、教育効果の違いとして表出したものと考えられる。

2 「自己信頼感」についての考察

「自己信頼感」について2要因分散分析を行った結果、性と調査時による交互作用効果はみられなかった。このことは、男子と女子で集団宿泊的行事の教育効果に違いがみられなかったことを意味している。

そこで、性による主効果と調査時による主効果についてそれぞれ検討した。

その結果、性による主効果がみられた。つまり、男子と女子の得点間に有意な差がみられたということである。なお、得点は男子の得点が女子の得点よりも高かった。

また、調査時による主効果もみられた。つまり、集団宿泊的行事開始前時と集団宿泊的行事終了時の得点間に有意な差がみられたということである。なお、得点は集団宿泊的行事終了時の得点が集団宿泊的行事開始前時の得点よりも高かった。別の言い方をすると、学年全体としてみた場合、集団宿泊的行事の教育効果がみられたといえる。

この原因について、集団宿泊的行事を指導した教師の見取り（生徒の行動観察）を基に考察する。

集団宿泊的行事中、生徒は、一人ひとりが自分の役割（班長、野外活動係、生活係、保健係、食事・衛生係といった仕事）をもち、主体的に活動し、仕事をきちんと行っていた。そのため、責任をもって自分の仕事をしたという充実感を男子も女子も味わうことができたものと思われる。また、ナイトウォークラリー、ウォークラリー、沢登りといった自分の力を試す場面をつくって活動させた。特に、先に述べたようにウォークラリーにおいては活動中、天候が急変し、小雨の中での実施となった。また、沢登りにおいても前日の雨天の影響を受け、良好な状況と

は言いがたい中での実施であった。その中で一人の落伍者も出ず、すべての班が活動を終えることができた。この体験を通して、生徒は成し遂げたという達成感を味わうことができたものと考えられる。男女ともに充実感や達成感を味わうことができたため、得点の上昇の仕方に違いが生じなかったものと考えられる。

3 「他者理解」についての考察

「他者理解」について2要因分散分析を行った結果、性と調査時による交互作用効果はみられなかった。このことは、男子と女子で集団宿泊的行事の教育効果に違いがみられなかったことを意味している。

そこで、性による主効果と調査時による主効果についてそれぞれ検討した。

その結果、性による主効果はみられなかった。また、調査時による主効果もみられなかった。つまり、男子と女子の得点間に有意な差はみられず、また、集団宿泊的行事開始前時と集団宿泊的行事終了時の得点間にも有意な差はみられなかったということである。

この原因について、集団宿泊的行事を指導した教師の見取り（生徒の行動観察）を基に考察する。

集団宿泊的行事中、生徒一人ひとりが自分の役割をもって主体的に活動したことは先に述べたとおりである。しかし、係の活動をしているようすを見る限り、自分の仕事をこなすので精一杯という感じであった。そのため、友達の気持ちを考えながら自分の仕事をするまでには至らなかったものと思われる。また、ナイトウォークラリー、ウォークラリー、沢登りといった班活動においては、先に述べたように女子が主導権をにぎって活動していることが多かった。そのため、話し合い、理解を深め合う場としては機能しなかったものと考えられる。また、これらの活動も自分のことで精一杯という感じになっていたものと思われる。このようなことから、友達（他者）へ目を向け、それぞれが相手の気持ちを推し量るといったところまで到達することができなかったと考えられる。

Ⅶ 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

庄内中学校が実施した集団宿泊的行事の教育効果について性別に着目して研究した結果、集団宿泊的行事の教育効果は、次の①～③のように尺度ごとに異なって表出した。

① 「学級内信頼感」は男子と女子で集団宿泊的行事の教育効果に違いがみられた。

② 「自己信頼感」は男子と女子で集団宿泊的行事の教育効果に違いがみられなかった。しかし、性別による得点差がみられ、また、学年全体としての教育効果がみられた。

③ 「他者理解」は男子と女子で集団宿泊的行事の教育効果に違いがみられなかった。また、性別による得点差がみられず、学年全体としての教育効果もみられなかった。

2 今後の課題

（1）庄内中学校における今後の実践について

庄内中学校では、研究の結果を基に今後の学級・学年経営の方針を検討した。そして、次の①～③を支援の重点とした。

① 男子の「学級内信頼感」の得点が上昇するように支援する。

② 女子の「自己信頼感」の得点が上昇するように支援する。

③「他者理解」の得点が上昇するように支援する。

さらに、庄内中学校の集団宿泊的行事としては、生徒がお互いの考えの異同に気づき、話し合う中で理解を深め合うことができるように工夫するなど、より良いプログラムになるように検討するという研究の方向性も決定した。

本論文の結果を受け、検討し、改善したことが、今後、教育成果として表出するのかについて検証していきたい。

（2）他の集団宿泊的行事について

集団宿泊的行事には、さまざまなタイプのものがある。今後、他の集団宿泊的行事の教育効果について検証し、本論文で得られた結果と比較することで各学校のプログラムのもつ特性（長所・短所）を明らかにしていきたい。そうすることで、児童・生徒が集団宿泊的行事を通して豊かに学べるようにしていきたい。

（謝辞）

ご指導・ご助言いただきました愛媛大学教育学部教授の深田昭三氏、愛知学院大学心身科学部教授の千野直仁氏、鶴見大学歯学部准教授の石村貞夫氏、日本文理大学工学部准教授の山本義史氏、千葉大学教育学部准教授の天貝由美子氏、兵庫県立神戸商業高等学校教諭の井上仁志氏、国立磐梯青少年交流の家事業推進課事業推進係長の片山貞実氏に感謝の意を表します。

（文献）

○　天貝由美子（1995）「高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響」，教育心理学研究，第43巻第4号，p.364－371

○　井上仁志（2003）「高校生の集団的非言語表現活動における人間関係形成の心理的変化プロセス」，兵庫教育大学修士論文，pp.76

○　片山貞実・駒田幸彦（2004）「青少年教育施設における冬期集団宿泊研修の教育的効果」，国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要，第4号，p.35－40

○　CONE（自然体験活動推進協議会）・日能研・日本文理大学共同研究事業（2004）「自然体験活動が参加者（児童・生徒）の心理変化に与える効果に関する研究」，pp.81

○　国立室戸少年自然の家（2004）「海の自然体験活動による新しい感動と発見をⅡ，海の自然体験活動研究会報告書（2年目）」，p.56－88

○　首藤弘明（1992）「集団宿泊的行事が児童の自主性に及ぼす影響－林間学校に関して」，児童心理，第46巻第6号，p. 132－137

○　瀧直也・平野吉直・寺沢宏次（2005）「キャンプが子どもの大脳活動と『生きる力』に及ぼす影響」，国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要，第5号，p.45－55

○　中島明男（1994）「旅行・集団宿泊的行事の教育効果について」，日本教育心理学会総会発表論文集，第36号，p. 282

○　中村織江・曽根田靖志・水谷修（2006）「研究と実践の融合を目指した長期キャンプの試み」，国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要，第6号，p.205－215